一〇一五年四月、つくばエクスプレス流山おおたかの森駅近くに「流山市立おおたかの森小中学校」が開校した。延床面積約二二、〇〇〇平方㍍、小・中合わせて五〇クラスに対応できる巨大な学校だが、内部には巨大さを感じさせない豊かな環境が広がっている。設計を手掛けたのは、公立ながら英語主体の教育で話題になったぐんま国際アカデミーやカタールのリベラル・アーツ&サイエンス・カレッジなど、優れた学校建築を作り出しているシーラカンスアンドアソシエイツ（ＣＡｔ）だ。

この学校が立地する流山市は、井崎義治市長が取り組んで来た認可保育園・学童保育定数倍増計画などが評価され、つくばエクスプレス沿線でも、子育てしやすい地域として知られるが、その具体的シンボルとなっているのが、冒頭の学校に先立って整備された「流山市立小山小学校」だ。地域施設が特別教室群と一体で整備され、地域に開かれたランチルームなど斬新な仕掛けを持つこの学校は、おおたかの森駅の反対側に二〇〇九年に開校している。「おおたかの森小中」同様に豊かな環境を誇るこの学校の存在が、住宅取得を考える若い世帯のニーズに適合し、おおたかの森駅の人気に繋がっているのだ。筆者は、「小山小」の計画が本格的に始まった二〇〇五年から「おおたかの森小中」が開校する二〇一五年までの約一〇年間、市の学校建築にスーパーバイザーとして関わってきた。

各人各説

「流山おおたかの森駅」は、どうして子育て層に人気の駅となったのか

東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻 教授

小野田泰明

Yasuaki Onoda

「小山小」は、民間資金を活用して公共サービスを調達するＰＦＩに、市が初めて取り組んだ事業で、私が呼ばれた二〇〇五年には、可能性調査を請け負ったコンサルタントが、ＶＦＭ（バリューフォーマネー：ＰＦＩの有効性を測る指標）の最大化を目指して、教育環境の質を無視した過大な床面積からなる条件を設定中であった。建設費の官民格差がまだ大きかった当時、延床面積を増やせばＶＦＭが上がるという不思議な状況にあったのだが、環境の質という説明しにくい概念を根拠に「数字」に逆らう人間など誰もいなかったのだ。そこでまず取り組んだのは、試設計を通じて数字がどのような結果を意味するのかを示しながら、ＰＦＩの条件を見直すことであった。これを通じて要求面積を適正化するとともに、ＰＦＩが生まれた英国の例に倣いながら質を評価出来る過程を構築した。これらを経て、安藤建設（現・安藤ハザマ）を中心とする事業体（設計担当は佐藤総合設計）が選ばれる。そして実際に出来た空間も良質なものをということになった訳だ。

「おおたかの森小中」に関しては、ＰＦＩではなく、流山市と開発委託を受けたＵＲが共同で設計プロポーザルを実施し、冒頭の結果を導いている。良い設計は、環境の価値を具現化し、それが世代再生産にも寄与する。偶然が重なったとはいえ、人口減少に苦しむ我が国にとって、示唆の多い事例ではないだろうか。